

[問]

昭和 44 年度 (問題)

午前の部

1. 一辺1の正方形 $ABCD$ において $[A, B)$ 上に任意に2点をとる。(すなわち2点は互いに独立な一様分布に従うものとする。)

いま、動点 P, Q がこれらの2点のうち A に近い方を P の始点, 他を Q の始点として, この周上を

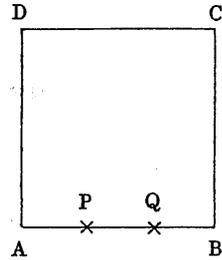
P : 毎秒 4

Q : 毎秒 3

の速さで $A \rightarrow B \rightarrow C$ 方向にまわるとき, P と Q がはじめて重なる点が

$[A, B), [B, C), [C, D), [D, A)$

上にある確率をそれぞれについて求めよ。



(注) $[A, B)$ は点 A を含み, 点 B を含まない線分 AB を意味する。

2. ある年度末において, ある国の人口が9,000万, その首都の人口が900万で, 毎年首都からその前年度末人口の2%が転出し, 首都以外の地方からその前年度末人口の0.5%が首都に転入して来るものとする。

いま, その国の人口が常に一定であるとすれば,

- (1) 時の経過とともに首都の人口はどのように変わっていくか。
- (2) 究極的に首都の人口は全人口の何割になっているか。

3. ある試行において事象 E の起る確率が p であるとき,

- (1) E がちょうど k 回起るまでその試行を独立に繰り返すものとして, その時までの試行回数を $k+X$ とする。 $X=0, 1, \dots$ である確率を求めよ。
- (2) 上の X の分布の特性関数を求めよ。
- (3) 平均値を求めよ。

[問]

(4) 積率母関数 $\mathcal{G}(\theta)$ についてその自然対数のべき級数展開を

$$\log(\mathcal{G}(\theta)) = \sum_{r=0}^{\infty} B_r \frac{\theta^r}{r!}$$

とする時、 B_1 、 B_2 を求めよ。

午後 の 部

4. 独立な確率変数 X 、 Y がいずれも正規分布 $N(0, 1)$ に従う時、 $Z = X + Y$ の分布関数を求めよ。

5. ある年度に契約を締結した保険群団 N_0 人から出発して、第 t 年度末に N_t 人が脱退し、次の年度始にただちに同じ人数の新規加入があるものとする。第 $t + 1$ 年度の加入者 N_t 人 ($t = 0, 1, 2, \dots$) のうち加入から i 年度後に脱退する人数は $a_i N_t$ 人で $a_1 + a_2 + \dots + a_k = 1$ とする。

(1) 新規加入者数 N_t は、その直前 k 年間の新規加入者数の一次結合で示されることを証明せよ。ただし、 $k \leq t$

(2) 新規加入者の数はある有限値に収束し、この群団は定常状態に近づくことを証明せよ。

(3) 上記(2)の極限值を求めよ。

昭和 44 年度 (解答)

午前 の 部

1. $AP=p$, $AQ=g$ とすると, はじめて重なるまでの時間 t は,

$$4t + p = 3t + g$$

$$\therefore t = g - p$$

このとき, $4t + p = 4g - 3p$

従って

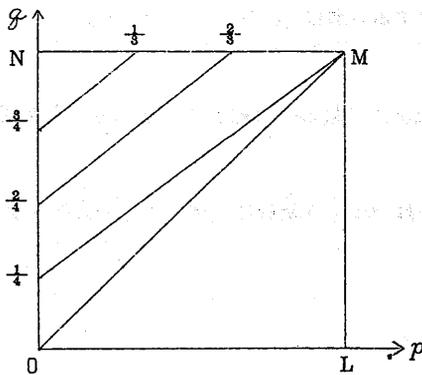
$$〔A, B〕上で重なるのは \quad 0 \leq 4g - 3p < 1$$

$$〔B, C〕上で重なるのは \quad 1 \leq 4g - 3p < 2$$

$$〔C, D〕上で重なるのは \quad 2 \leq 4g - 3p < 3$$

$$〔D, A〕上で重なるのは \quad 3 \leq 4g - 3p < 4$$

のときとなる。(p が A に着くまでに必ず重なる。)



さて, (p, g) は左図において $\triangle OMN$ 内および $(0, N)$ 上で一様, $(0, M)$ 上でその半分の確率をもって分布する。

従って, 求める確率は上記不等式で示された四つの部分の面積比となり, $(0, M)$ 上の差は面積比に関係なし。)

- 〔A, B〕上で重なる確率 $\frac{1}{4}$
 〔B, C〕上で重なる確率 $\frac{5}{12}$
 〔C, D〕上で重なる確率 $\frac{1}{4}$
 〔D, A〕上で重なる確率 $\frac{1}{12}$

2. t 年経過後の首都の人口を $u(t)$ とすれば, その時の首都以外の人口は $9 \times 10^7 - u(t)$ である。題意により

$$\begin{aligned}
u(t+1) &= (1-0.02)u(t) + 0.005(9 \times 10^7 - u(t)) \\
&= 0.975u(t) + 45 \times 10^4 \\
u(1) &= 0.975u(0) + 45 \times 10^4 \\
u(2) &= 0.975\{0.975u(0) + 45 \times 10^4\} + 45 \times 10^4 \\
&= 0.975^2 u(0) + 45 \times 10^4(1 + 0.975) \\
&\dots\dots\dots\text{以下順次同様にして} \\
u(t) &= 0.975^t u(0) + 45 \times 10^4(1 + 0.975 + 0.975^2 + \dots + 0.975^{t-1}) \\
&= 0.975^t u(0) + \frac{1-0.975^t}{1-0.975} \times 45 \times 10^4 \\
&= 0.975^t \left\{ u(0) - \frac{45 \times 10^4}{1-0.975} \right\} + \frac{45 \times 10^4}{1-0.975} \\
u(0) &= 9 \times 10^6, \quad \frac{45 \times 10^4}{1-0.975} = 18 \times 10^6 \quad \text{から} \\
u(t) &= 18 \times 10^6 - 0.975^t \times 9 \times 10^6 \\
\frac{\lim_{t \rightarrow \infty} u(t)}{9 \times 10^7} &= \frac{18 \times 10^6}{9 \times 10^7} = 0.2
\end{aligned}$$

t 年経過後の首都の人口は上記 $u(t)$ 式で表わされ、十分長い時間後には全国の 20% に達する。

3. (1) 独立な試行を $x+h-1$ 回繰り返すまでに事象 E が $h-1$ 回起る確率は、

$$\binom{x+h-1}{h-1} p^{h-1} (1-p)^x$$

だから、求める確率は

$$P(X=x) = \binom{x+h-1}{h-1} p^h (1-p)^x \quad (x=0, 1, 2, \dots)$$

である。

(2) $\binom{x+h-1}{h-1} = (-1)^x \binom{-h}{x}$

であるから、求める特性函数を $\phi(t)$ とすると

$$\phi(t) = E(e^{itX}) = \sum_{x=0}^{\infty} \binom{x+h-1}{h-1} p^h (1-p)^x e^{itx}$$

$$\begin{aligned}
&= \sum_{x=0}^{\infty} \binom{-h}{x} p^h (-q e^{it})^x && (q=1-p) \\
&= p^h (1-q e^{it})^{-h}
\end{aligned}$$

(3) 先ず、積率母函数は、 $\phi(t)$ において $it = \theta$ とおけばよいから、

$$g(\theta) = p^h (1-q e^{\theta})^{-h}$$

である。そこで、 X の平均値は

$$\begin{aligned}
E(X) &= \left[\frac{\partial}{\partial \theta} g(\theta) \right]_{\theta=0} = \left[-h p^h (1-q e^{\theta})^{-h-1} (-q e^{\theta}) \right]_{\theta=0} \\
&= h p^h q (1-q)^{-h-1} = h \cdot \frac{q}{p}
\end{aligned}$$

(4) $\log(g(\theta)) = h \log p - h \log(1-q e^{\theta}) = -h \log\left(1 - \frac{q}{p}(e^{\theta}-1)\right)$

$$\begin{aligned}
&= -h \left\{ -\frac{q}{p}(e^{\theta}-1) - \frac{1}{2} \frac{q^2}{p^2} (e^{\theta}-1)^2 - \dots \right\} \\
&= -h \left\{ -\frac{q}{p} \left(\theta + \frac{\theta^2}{2!} + \frac{\theta^3}{3!} + \dots \right) - \frac{1}{2} \frac{q^2}{p^2} \left(\theta + \frac{\theta^2}{2!} + \frac{\theta^3}{3!} + \dots \right)^2 - \dots \right\} \\
&= h \frac{q}{p} \theta + \left(h \cdot \frac{q}{2p} + h \cdot \frac{q^2}{2p^2} \right) \theta^2 + (\theta \text{の3次以上の項})
\end{aligned}$$

ゆえに $B_1 = h \frac{q}{p}$

$$B_2 = h \cdot \frac{q}{p} + h \cdot \frac{q^2}{p^2} = h \cdot \frac{q}{p^2} (p+q) = h \cdot \frac{q}{p^2}$$

午後の部

4. X, Y の密度函数はそれぞれ $\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{x^2}{2}}$, $\frac{1}{\sqrt{2\pi}} e^{-\frac{y^2}{2}}$ であるから、

$$F(z) = \frac{1}{2\pi} \iint_{x+y \leq z} e^{-\frac{x^2+y^2}{2}} dx dy$$

$$x + y = u, \quad x - y = v \quad \text{とおくと,} \quad x = \frac{u+v}{2}, \quad y = \frac{u-v}{2}$$

$$\therefore \begin{cases} x^2 + y^2 = \frac{u^2 + v^2}{2} \\ \frac{D(x, y)}{D(u, v)} = \begin{vmatrix} \frac{1}{2} & \frac{1}{2} \\ \frac{1}{2} & -\frac{1}{2} \end{vmatrix} = -\frac{1}{2} \end{cases}$$

$$\therefore F(z) = \frac{1}{2\pi} \int_{-\infty}^z \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{u^2+v^2}{4}} \cdot \frac{1}{2} \cdot du dv = \frac{1}{4\pi} \int_{-\infty}^z e^{-\frac{u^2}{4}} du \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{v^2}{4}} dv$$

$$\text{そこで } \frac{1}{\sqrt{2\pi}(\sqrt{2})} \int_{-\infty}^{\infty} e^{-\frac{v^2}{2(\sqrt{2})^2}} dv = 1 \quad \text{であるから,}$$

$$F(z) = \frac{2\sqrt{\pi}}{4\pi} \int_{-\infty}^z e^{-\frac{u^2}{4}} du = \frac{1}{2\sqrt{\pi}} \int_{-\infty}^z e^{-\frac{u^2}{4}} du$$

5. (1) 題意により $N_1 = a_1 N_0$

$$N_2 = a_2 N_0 + a_1 N_1$$

.....

.....

$$N_h = a_h N_0 + a_{h-1} N_1 + \dots + a_1 N_{h-1}$$

$$N_{h+1} = a_{h+1} N_0 + \dots + a_2 N_{h-1} + a_1 N_h$$

一般に ,

$$N_t = a_t N_{t-h} + \dots + a_1 N_{t-1}$$

即ち、或る年度の新規加入者は、その前 h 年間の脱退者の加重平均である。

(2) $\text{Max}(N_h, N_{h+1}, \dots, N_{h+t-1}) = \bar{N}_{h+t}$

$\text{Min}(N_h, N_{h+1}, \dots, N_{h+t-1}) = \underline{N}_{h+t}$ とおくと,

$$\bar{N}_{h+t+1} = \text{Max}(N_{h+1}, N_{h+2}, \dots, N_{h+t}) \leq \text{Max}(N_h, N_{h+1}, \dots, N_{h+t-1}) = \bar{N}_{h+t}$$

$$\left\{ \begin{array}{l} \because N_{h+t} \leq (a_h + a_{h-1} + \dots + a_1) \text{Max}(N_h, N_{h+1}, \dots, \\ \dots, N_{h+t-1}) \\ \leq \bar{N}_{h+t} \end{array} \right.$$

即ち, $\bar{N}_{h+t} \geq \bar{N}_{h+t+1} \geq \bar{N}_{h+t+2} > \dots$ で $\{\bar{N}_t\}$ は単調減少
 全く同様に $N_{h+t} \leq N_{h+t+1} \leq \dots$ で $\{N_t\}$ は単調増加 } で共に有界

であるので, 夫々極限值 A, B を有する。

今 A ≠ B とすれば矛盾することを云う。

A ≠ B とすれば $A > B + \delta$ なる正の数 δ が存在し, 十分大きな δ に対して

$$\bar{N}_t > N_t + \delta$$

$$N_t - \underline{N}_t = a_h(N_{t-h} - \underline{N}_t) + a_{h-1}(N_{t-h-1} - \underline{N}_t) + \dots + a_1(N_{t-1} - \underline{N}_t)$$

$$N_t = \underline{N}_t \quad \text{とおくと} \quad a_i(N_t - \underline{N}_t) = 0 \quad \text{より}$$

$$N_t - \underline{N}_t \leq (a_h + a_{h-1} + \dots + a_{i+1} + a_{i-1} + \dots + a_1)(\bar{N}_t - \underline{N}_t)$$

$$\leq (1 - a_i)(\bar{N}_t - \underline{N}_t)$$

$$N_t \leq \bar{N}_t - a_i(\bar{N}_t - \underline{N}_t) \leq \bar{N}_t - a_i \delta$$

$$\bar{N}_{t+h} = \text{Max}(N_{t+h-1}, \dots, N_t)$$

$$\leq \text{Max}(\bar{N}_{t+h-1} - a_i \delta, \dots, \bar{N}_t - a_i \delta)$$

$$\leq \text{Max}(\bar{N}_{t+h-1}, \dots, \bar{N}_t) - a_i \delta = \bar{N}_t - a_i \delta$$

以下同様にして, $\bar{N}_{t+n} \leq \bar{N}_t - n a_i \delta$ となり, 之は N_t が有界であることに矛盾す

する。従って, A = B

(3) 極限値を求める。

$t+1$ 年度始の人数を契約年度別に列挙すると, 夫々新契約から以後の脱退数を差引
 いて,

$$\begin{array}{ll}
\text{初年度} & N_t = (a_1 + a_2 + \cdots + a_h) N_t \\
\text{次年度} & N_{t-1} - a_1 N_{t-1} = (a_2 + \cdots + a_h) N_{t-1} \\
& \dots\dots\dots \\
h \text{年度} & N_{t-h+1} - a_1 N_{t-h+1} - \cdots - a_{h-1} N_{t-h+1} = a_h \cdot N_{t-h+1}
\end{array}$$

総数は最初から N_0 人で変わらないから

$$N_0 = (a_1 + a_2 + \cdots + a_h) N_t + (a_2 + \cdots + a_h) N_{t-1} + \cdots + a_h N_{t-h+1}$$

$$\lim_{t \rightarrow \infty} N_t = N \quad \text{とおくと}$$

$$N_0 = (a_1 + 2a_2 + \cdots + h a_h) N$$

$$\therefore N = \frac{N_0}{a_1 + 2a_2 + \cdots + h a_h}$$